作品番号：1
選択画像：A
作品タイトル：円頓寺へ行ってみようかな

　円頓寺商店街は私のルーツだ。昭和一桁生まれの祖母は円頓寺出身だ。
でも、今日も私は円頓寺の写真を眺めるだけ。
円頓寺商店街へ行ったことがない。
祖母の家は、円頓寺で大きな雑貨屋をやっていて、
祖母は奉公人や女中さんと一緒に大家族で育ったのだという。
祖母は戦争が始まる前の子供時代の楽しかった思い出をよく私たちに聞かせてくれた。
学校の友達が遊びにくると、父親（私の曽祖父）がブランデーをスプーンに一匙ずつ
みんなに飲ませてくれたことや、大相撲の巡業で迷子になったことや。
祖母の家は終戦直後にお店をたたんでしまった。
戦争にいった父親が帰ってこず、暮らしのためにお店も家も売ってしまったのだという。
　　私の家も両親は忙しく、私は祖母に育ててもらったようなものだ。
祖母は娘（私の母）を慈しみ、私の父が建てた小さな一軒家をいつもピカピカに磨き上げ、お風呂ではいい声で
歌っていたし、花火や町内のお祭りとか、お盆やお彼岸のおはぎや牡丹餅作りとか、お正月とか、
とにかく賑やかなことが大好きだった。
幼稚園児の頃、祖母は買い物帰りに幼稚園のすかし塀の向こうから
園庭で遊ぶ私をニコニコ眺め、「鼻紙、ハンカチ忘れとらんか？」と声をかけるのである。
忘れているわけはない。
毎朝、分厚く畳んだ鼻紙とアイロンをかけたハンカチを幼稚園の制服のポケットに
祖母がちゃんといれてくれていたのだから。
　祖母は、円頓寺のお店をたたんでから、一度も円頓寺へ行くことはなかった。
母が言うことだから間違いはない。
　私が社会人になった翌年祖母は亡くなった。
少したって母が教えてくれた。母は祖母の養女なのだと。
私を大きな愛情でくるんでくれた祖母。私は母の話を聞いて大泣きした。
悲しかったからではない。
祖母の温かく大きな愛情に対する感謝の気持ちを抑えきれなかったからである。
　さて、円頓寺。
悲しい程大好き過ぎて祖母が帰れなかった円頓寺。
今年のパリ祭のときに行ってみようか。

作品番号：2
選択画像：A
作品タイトル：活気、寂寥、喧騒、静寂

「今日もここー？」少女が言う。「今日もここ。」その姉が言う。道端の日陰に木のイーゼルと真っ白なスケッチブックを置いて、カラフルな絵の具を取り出し、椅子に腰掛け筆をとる。描く対象は目の前、下町情緒溢れる円頓寺商店街。姉は毎週ここに通い、全く同じ場所から、全く同じものを描いている。アリスのような少女からしてみれば、姉のしていることは全くつまらないことである。しかし姉のその目は好奇そのもので、絶景でも見ているかのようだった。横の小さな椅子に掛けて、足をふらつかせる。つまんないな。少女はそう思いながら、とうとう眠ってしまった。しばらくして目を覚ますと、姉はすっかり絵を描き上げていた。姉の絵は世界一上手だと思う。色使いが絵本みたいで大好きだ。でも、この場所の絵しか見たことがなかった。どこか満足気な姉に、少女は気になっていたことを聞いてみることにした。「なんでお姉ちゃんは、ここしか描かないの？」姉は、はにかんで答えた。「この街を描きたいからだよ。」と。「この街なら、別のとこでもいいじゃん！」姉は答える。「大人になったら分かるようになるかもね。」曖昧な答えに、少女はムッとした。「やだ、今知りたいもん。」少女は駄々をこねた。「んー、じゃあ仕方ない。おいで。」姉は手招きをし、少女を膝の上に座らせた。そしてスケッチブックをめくっていった。「これ、いつの日のやつか分かる？」「うーん、あ！飾りがあるから、七夕のやつだ。」「そうだね。じゃあ……こっちは？」「え？うーん……なんか暗いね。何があったの？」「これはね……なんでもない冬の商店街。寒くて皆出歩かないから、寂しげで暗いの。」「そうなんだ……でも、同じとこなのに、不思議だね。」「でしょ？この街のこと私大好き。だからずーっと、同じところから描いてるの。どんなことがあったのか、ずっと覚えてたいから。」次の週末には、小さな商店街がひとつ増えていた。

作品番号：3
選択画像：A
作品タイトル：変化するタイムカプセル

「何でもいいから、自由に好きなことを書きなさい」
　先生は言った。
　私が十歳のときのことだ。三十年後の自分に向けて手紙を書く。それはまとめて土の中に埋められ、三十年後に掘り返される。タイムカプセルと呼ばれたイベントだった。
　いつもは人権についてだとか、社会見学の工場の感想だとか、書くことが決められていた。急に自由にされても困る。
　困った私は、好きな食べ物と当時好きだった同級生のことを書いた。あろうことか、どうして好きなのか、それは誰なのかフルネームで名前まで書いた。三十年後の私は忘れていると思ったのだ。おまけに自分宛だから他に誰も読まないと勘違いした。とても浅はかだ。
　数年後から「あれは先生やタイムカプセルに入れる人も読んだのではないか？　三十年後、役所の壁に貼りだされたらどうしよう？」と思い出しては暗澹たる気持ちになった。
　ノストラダムスの大予言が当たったら、あの手紙が役所に貼りだされることはない、などと思ったりもした。
　しかし、ノストラダムスの大予言は当たらず、月日は流れ、三十年後はやってきた。やってきたが、何も起こらなかった。手紙は私の家に届かなかったし、役所の壁に貼られたという噂も聞かなかった。私は胸をなでおろした。
　更に十年が過ぎ、今、私は円頓寺商店街に来ている。来て感じたのは、ここはタイムカプセルみたいなところだということだ。シャッターが閉まっている店の前をゆっくりと過ぎる。ここはあの手紙に書いた好きな食べ物のお店があった。
　本当のタイムカプセルは変化していくのだ。
　おしゃれなカフェに入る。
　ふいに名前を呼ばれ我に返ると、四十年前、十歳のときに好きだった同級生が笑っている。……結婚した時よりずいぶんしわが増えた。
「これから久しぶりに名古屋港水族館に行かないか」
　猫舌の彼は運ばれてきたコーヒーを舐めるように飲んだ。給食のスープもそうやって飲んでいた。
　変化するタイムカプセル。私もあなたも。

作品番号：4
選択画像：B
作品タイトル：14,000km の門出

「オレンジ色は、雪と氷で真っ白な南極でも見つけやすいんだよ」
南極への 14,000km におよぶ航海を、何度も成功させた偉大な船、南極観測船ふじ。そのオレンジ色の船体を見つめながら、母の言葉を思い出す。

明日、私は南極に出発する。
白い大きな帆船のようなポートタワー、海を渡る橋、水族館に向かう家族連れ、南極を生き抜いたタロとジロ。ガーデン埠頭から見える風景ともお別れだ。名古屋で生まれた私は、まだ南極を知らない。

南極行きのメンバーに選ばれるまでの日々は、苦難の連続だった。ライバルたちとしのぎを削る日々に、何度も挫けそうになった。それでも乗り越えられたのは、水泳で身につけた体力のおかげだったと思う。泳ぐことは今でも大好きだ。水中なら私は無敵。空を飛ぶように自由になれる。

そして運命の日、メンバーに選ばれた私に、母は「あなたなら大丈夫」と目に涙を浮かべ、応援してくれた。

「そろそろ行こうか」と急かす案内係に促されて、私は用意された車に向う。乗り込むとラジオからニュースが聞こえてきた。
「明日、南極観測隊が日本から出発します。乗組員たちは 2 ヶ月かけて南極を目指します」

さぁ、いよいよ出発だ。

「また、今回初の試みとして、名古屋港水族館で産まれたアデリーペンギンの里帰りが計画されています」

私は、ブルルっと短い翼を震わせてから、ペタペタと短い足でケージに乗り込んだ。

作品番号：5
選択画像：B
作品タイトル：今日という日は

ピピピ。美奈子は無意識にアラームを止めた。スヌーズで再度、鳴った。はっとする。瞬きを何度もして目を見開く。時計は 6 時 45 分。あと 16 分しかない。美奈子はパジャマの上に兄のお下がりのベンチコートを羽織った。裸足にファー付のサンダル。少しの辛抱だ。美奈子は寒風の中を飛び出した。
南に向かってケッタが走る。街は静かだ。
中学生のころ、美奈子たちは徒党を組んでケッタを走らせた。集合場所は名古屋港ガーデンふ頭。高校生になった去年、参加者が減った。今年はだれも来やしないだろう。
「でも、わたしは行くよ」とベンチコートの中でハート柄のパジャマが叫んでいる。
だんだんあたりが明るくなってきた。ペダルをこぐ足に力が入る。
どんつきにはもう人がいっぱいだった。
「どっち？」
「もう、出たの？」
人々が元旦の太陽を探している。空が白んでも日はそう簡単には出てこない。
後ろから「おい、美奈子じゃねえか」と声がかかった。健だった。健は部活用のベンチコートを羽織っている。
「だれも来んとおもった」と美奈子が笑った。良い天気だ。太陽が昇り始めると歓声が沸き起こった。となりで健が手をあわせて願いごとをしている。美奈子も付き合う。
『なにかいいことがありますように』
実に、おおざっぱだ。
健が言った。
「あけましておめでとう」
あ、そうだ。それ言わなきゃね。美奈子もあわてて「あけましておめでとう」と返す。
「元旦だからってそれがなんだ。今日は昨日のつづき。明日へのタダの通過点だよ」と健は笑いながらベンチコートを美奈子の目の前でパッと開いた。
やめてくれ。それ、痴漢のやるやっちゃ。
その中はジャージと短パンだった。
「おれ、冬でもこの格好で寝ている」
「パジャマ？」
「そうだよ。元旦はおれにとって日常だ」と笑い、「帰ったらまた寝よう」と去って行った。
美奈子は「どいつもこいつも自由すぎる」と、ファー付サンダルに目を落とした。

作品番号：6
選択画像：B
作品タイトル：景色の先に

　名古屋港水族館に向かう楽しそうな声に、NAGOYA のモニュメントで写真を撮る人たち。
　その賑やかさに顔を上げると、その向こうには白とオレンジの船、南極観測船ふじがあった。
　あの船を離れて見るのが嫌いだった。
　あの船体の色は南極ようなの白い世界では見つかりやすいらしい。でも、ここだと他の景色に混ざってしまう。
　道に迷い、遭難しても助けてくれる人はいない。誰にも見つからない。
　南極のように寒くなくても、ここはひどく寒い。
「どうした？」
　突然立ち止まった私に気付き、彼が声をかけてきた。私は首を振り彼に追いつく。
「なんでもない」
　それだけ伝えて、もう一度船を見る。彼が私の視線に気づいたのか、彼も船の方を見た。
「船？見に行く？」
　私はもう一度首を振った。
　彼の差し伸べた手を握る。その暖かさで寒さが溶けていく。
「あ、そうだ。あの船がどうしてオレンジ色なのかって知ってる？」
　きっと先に調べてくれていたのだろう。今思い出したかのような不自然さが少しおかしい。
　曖昧に首を振ると、彼がアラートオレンジについて教えてくれた
「でも、ここで遭難したら、誰にも見つからないかもね。他の景色に紛れちゃって」
　そう言うと、彼は立ち止まって船を見た。私は水族館の方を見る。
　しばらくしてしてから「必要がなくなったんだよ。助けを呼ばなくても、周りに誰かがいるから」と言った。
　はっとして私も船を見た。そこにはずっと 1 隻だけでポツンとしていた船が、安心したように景色に溶け込んでいる姿があった。

作品番号：7
選択画像：B
作品タイトル：母なるペンギン

「おかーさん、ペンギン！」
　南極観測船『ふじ』を下り、ポートブリッジを半ばまで渡ったところで息子(５)が上を指差す。つられて上を向いた私の帽子を海風がさらっていった。
「ペンギン？」
「うん、あっちいった」
　息子の視線のさらに先に水族館が見える。ペンギンは橋の上を飛ばない。たぶんカモメか何かだろう。

「おかーさん、ペンギン！」
　幼稚園の遠足で毎年来ている息子は私よりずっと水族館に詳しい。順路をこっちこっちと引っ張られ、ペンギン大水槽に最短で急行した。ガラスの向こうでペンギンたちが氷山に暮らす。陸では歩くのも大儀そうなのに、水辺から滑り込むと完璧な流線型で波をとらえて海中を飛ぶ。ペンギンは確かに鳥だ。

「おかーさん、ペンギン！」
　出口前のミュージアムショップ、あらゆる海の生き物グッズが子どもを魅了するスポット。夢の世界に一瞬圧倒された息子が一点に吸い寄せられる。
「これ！」
「ん？ペンギン？」
　帽子を飛ばされたのは私なのに、なぜか息子の帽子を買っている。しかもあれだけペンギンフィーバーしておいて、彼が嬉しそうにかぶっているのはシャチの帽子だった。

「おかーさん、ペンギン！」
　水族館を出たところに大小のペンギン像がいた。
「おかーさんペンギンと、あかちゃんペンギン？」
「んー、これは世界最大と最小のペンギンだって」
　銘板の説明から顔を上げると、私より背が高い古代ペンギン・アントロポロニスと目が合う、はずだった。
「ぼうしかぶってたら、まえみえないよねえ」
　世界史上最大のペンギンが見覚えのある帽子をかぶっている。ちょっと失礼して手に取ると、目印の缶バッジも確かに私のものだった。

　帽子が戻った帰り道、ずっと気になっていたことを息子に伝える。
「あのね、おかーさんは、ペンギンではないよ」

作品番号：8
選択画像：B
作品タイトル：まったいらな海

　まったいらな海はこころをまったいらにする。こころが騒がしくてざわざわするときは海を見にゆく。まったいらな海がいい。
　ぼくの家から自転車でゆける海は名古屋港しかない。名古屋港の海は特別きれいではないが、ひっそりとした都会のオアシスである。名古屋港水族館があり人混みが多いと思われがちだが、海を見る人は少ない。
　水族館裏の海の見えるスポットは人気が少なく、雄大な海を見渡せる。ぼくはこころが晴れないときここで海を見る。水族館をぐるりと廻り芝の上へ自転車を横倒しにし、海が見渡せるお気に入りの木製の椅子に座る。時間感覚が分からなくなるくらいぼうっとして、波ひとつ立っていないまったいらな海を見る。広大な海と空。水平線はまっすぐ引かれているが、次第に海と空の境目が淡くなりのっぺりとした空間が広がる。
　夕焼けに光り照らされ世界がオレンジ色に染まる。まったいらな海を見てリセットされたこころを暖かく色づける。ぼくはまた頑張ろと思う。余りにも雄大な海と夕焼け空。小さなことで悩んでんじゃねえ。おい。こころ燃えたぎらせろよ。走れ。
　ぼくは木製の椅子から立ち上がり、うおと叫びまったいらな海へと駆け出した。ざぶと足が取られると思ったら、しっかり踏み込める感触があり、海は固まりコンクリートのようで、どこまでもまったいらに続いていて、ぼくはどんどん加速してゆき、走り続けた。
　気づけば老人になっており、ぼくはお気に入りの木製の椅子に座り、まったいらな海を見ている。
　男の子が隣に遠慮なしに座ってきて、んと訝ったが、元気がないので、どうした？と声をかけた。
「ちょっと厭なことがあって」
「よい場所にきたな。前を見てみろ。まったいらな海が広がっているだろ。そして踏み込んでみるんだ」

作品番号：9
選択画像：B
作品タイトル：南の極へ

「味噌煮込み食いてぇな」
「このクソ暑い日にか？」
「バカ言え。夏の暑い日にキンキンに冷えたとこで食う味噌煮込みうどんが一番うめぇだろ」
　海からやってきた暖かい風が俺たちの頬をねっとりと撫でる。
　まとわりつくような暑さに不快感を覚えながら、目の前に悠然と佇む船を眺めていた。
「俺は、どっか涼しいとこに行きてぇな」
「だから言ったじゃねぇか。もうちょい水族館で涼んでようぜって」
　お前も反論なく出たじゃねぇかと突っ込みたくなるが、それだと水掛け論になる。
　こんな暑い中、無駄に疲れるだけのことなんてしたくない。
「見たいもん見れたんだからいいだろ。それにあんなカップルまみれの場所にいたら狂っちまう」
「相変わらずロマンが無いねぇ、お前は。あ、無いのは心の余裕か」
「うるせぇ、余裕がねぇのは百歩譲って認めるが、ロマンぐらいあるわボケ」
　認めんなよと言いたげな笑顔を浮かべる。海面は夕日を反射し、キラキラと輝きながら船を照らしていた。
　まばゆい光に目を細めていると、そいつは俺に聞いてきた。
「ほー？　ロマンね？　例えば？」
　俺は勢いで口をついてしまった言葉の着地点を探す。
　あたりは一面、海ばかり。しかし、案外それはすぐに見つかった。
「……南極」
「は？」
「あの船に乗って、南極に向かう」
　俺が指さした船を、しばらくぽかんと眺め続けていた。
「……なんだよ」
「いや……おまえ……ぷっ」
　そいつは必死に笑いを堪え、肩を震わせている。
「で？　南極？　そんなクソ寒いとこ行ってどうすんだよ。寒いだけのそこでよ？」
　ニヤニヤと笑うそいつは、バカにしつつも何かを期待する目で俺を見た。
　心の中でやれやれと溜息をつく。しかし、こんな会話で時間を浪費するのも悪くない。
　そう思った。
「味噌煮込み食うんだよ」

作品番号：10
選択画像：B
作品タイトル：レゴランドは名古屋港に

「パパ、レゴランドに行きたいな。ねぇ、水泳の練習も頑張るからさ」
「うーん、そうだな。お前は最近よく頑張っているし、ご褒美に連れて行こう」
「わーい、やったあ」
日曜日の夜。明日はパパのお仕事がお休みです。
親子は、そーっと地下の隠し扉を開けて、広い港に出ました。

彼らは、名古屋港水族館のイルカの親子。
今夜は秘密のお出かけです。

「わぁ大きなお船！　ヘリコプターもあるよ」
「本当だ。よくできているなぁ。本物みたいだ」
「いつか、本物を見てみたいよ」
いつもプールから見上げている乗り物は、ぼうやにもパパにとっても憧れです。
「見てみて、ブロックがいっぱい。カラフルだね」
「四角いブロックを、崩れないように積んでごらん」
「おっとっと。難しいね。でも楽しい」
ぼうやはおっかなびっくり、小さめのブロックで遊びます。
「ねぇ、こっちには変わった形のブロックがあるね」
「それは、アルファベットだよ」
「へぇパパ、すごーい！　なんて読むのかな？」
ぼうやに褒められてパパも嬉しそう。

「沢山遊んだね。そろそろ帰ろうか」
遊んだブロックを綺麗に片付けて。
朝が来る前に、水族館のプールに戻ります。
ぼうやは満足そうな笑顔を浮かべて夢の中へ。その様子を見てパパもニッコリ。親子は寄り添って眠りました。

さて、朝が来ました。
なんだか港が騒がしいようです。
「おい、夜のうちに小さいコンテナが整理されているぞ」
作業員のおじさんたちはビックリ。

実は
親子が遊んだのはレゴランドではなく、名古屋港だったのです。
彼らが見た船は南極観測船ふじと、甲板に搭載されたヘリコプター。
ぼうやが積んだのは、港のコンテナだったのでした。

でも、良いんです。
ぼうやにとっては、夢の遊園地そのものだったのですから。

あっ！　一つだけ。
「N，A，G，O，Y，A」のアルファベット。
ぼうやは「G」の文字だけ、斜めにして戻してしまいました。

ほら、やってきたお客さんたちが、驚いて見ていますよ。

作品番号：11
選択画像：C
作品タイトル：あの日の未来

吸って、吐く。

たったそれだけのことが、ひどく難しくなってしまった。

若かった頃は
切符の状態で、その人のことが判ったもので
(汗ばんでいる……緊張しているな、新しいスーツの青年よ)
(折れてクシャクシャだ……涼しい顔だが電車遅延に心中イラついているのだろう、このご婦人)
などと測っては
密かにエールを送ったり同情したりしたものだったが
もう、それを
楽しむことは、無い。
『お役御免』だ。

案の定、
その日はすぐにやってきた。
俺は、工具箱を提げた作業着の男たちに囲まれた。

――ふと、
オアシス２１が出来た頃のことを思い出した。
あの場所から一番近い改札機が、俺なんだ。
利用者が一気に増えたよ。
息つく間もないくらい忙しかったけれど、
賑やかなこの街がもっと愛される場所になったことを感じて嬉しかったもんさ――

耳をつんざく音が近づく。
電動ドリルの先が回転する。
さあ、サヨウナラだ。今まで楽しかったよ。

「ハイ、今日からまたお願いしますよ」
駅長の声がした。
体が軽い。
俺は　タッチ式改札機に生まれ変わった。

（俺は、まだ　此処に居て良いのか……！）
心の声が聞こえたかのように、俺をポンポンと撫でながら駅長は言った。
「近い未来に、中日ビルが新しくなるって話があってね。
まだまだ頼むよ」

少しずつ形を変えながら、
いつだって栄えてきたこの街。
今日、ついに中日ビルがリニューアルオープンする。
(今日はどの人も、急ぎ足でタッチして通り抜けて行く。みんな、新しい中日ビルに行くのが待ちきれないんだ)
流れるリズムの様に、無数の軽快なタッチを受け付けながら
今日のことを“未来”と語ったあの日のことを、
感慨深く思い出す。

作品番号：12
選択画像：C
作品タイトル：イエローライン

　結婚式の引き出物を網棚に乗せて吊革を掴む。久しぶりに乗る東山線は、終電間際でもまだ混みあっていた。手すりにもたれかかり、扉の上の路線図を眺める。単線一本しか走っていない地元と違って、名古屋の地下鉄はいつ見ても複雑だ。色とりどりの路線が交差して、あっちで別れたと思ったら、こっちでまた再会する。
「何だか人生みたいだよね。」
　昔得意げに言った僕に、
「すぐに人生に例えるのって、おじさんみたいだから止めた方がいいよ。」
　笑いながらそう答えたのは、卒業以来会っていない学生時代の女友達だった。
　彼女は今日の式には来ていなかった。「本当は呼んだんだけど、最近お店始めて忙しいんだって」。彼女と三人でよく遊んだ新婦が、残念そうに教えてくれた。それを聞いた時、僕も残念そうに見えただろうか。それとも安心して見えただろうか。
　ホテルのある栄で電車を降りて、改札に向かう階段を上る。学生時代僕は一社に、彼女は岩塚に住んでいたから、二人で遊ぶ時はいつも中間の栄で、お酒好きの彼女と遅くまでよく飲んだ。いつか二人でバーをやろう。酔いが回ると、彼女はいつもそう言った。
　改札をくぐろうとした時、階段下から高畑行きの最終電車の到着を告げる、鈴が連なるようなメロディが聞こえた。珍しく泥酔した彼女に肩を貸しながら、その曲名を教えてもらった事があったはずだが、その名前がどうしても出てこなかった。
　スマホを取り出すと、いつの間にか新婦からの LINE が届いていた。「彼女のお店」その後に続いたリンクを開いて、思わず声が出る。そこにあったのは、「イエローライン」という店名。それは、彼女から聞いたあの曲名だった。
「これに乗ったら、どんな明日にでも行けそうな名前じゃない？」
　あの時そう言った彼女の声が聞こえた瞬間、思わず階段を駆け下りていた。ホームには扉の開いた電車が停まっていた。車体の横の黄色い線が、眩しく光って見えた。

作品番号：13
選択画像：C
作品タイトル：改札を抜けて向かう先

「私は東山線だけど……、最寄り名城線だっけ？」

5 番出口から降りて改札の少し手前、券売機の前まで来たところで、隣を並び歩く貴女に声をかけた。

貴女は「そうそう。下まで一緒だね。」と既に手に持っていた manaca を改札の青い光にタップする。
私も慌てて財布を取り出した。

貴女の背に続いて改札を抜け、一緒に東山線ホームへの階段へ進む。
お互いの足取りには少しの名残惜しさも無く、ただそれが心地よくて、またすぐに会える。と、思いたい。

「今日は結構飲んだねえ。2 軒目のお酒が、特に美味しかった。」
猫背のまま笑う貴女と、パチリと目が合う。
「また行こうね！」
と咄嗟に笑い返した。

東山線のホームに降り立てば、手を振る時間まであと少し。ホームの真ん中を進み、さらに地下へ潜る階段へ一緒に向かう。
まだ少しアルコールが回る頭で、この愛おしい時間に浸る。

「じゃあ、また。」
名城線のホームへ続く階段の前で、貴女が立ち止まり、振り返って手を上げた。筋の目立つ綺麗な手。
「家に着いたら連絡するね。」
と私が小さい手を振り返すと、貴女は前傾で階段を降りて行く。
身長が高いから、自然と猫背になるらしい。
あ、イヤホンつけてる。
その姿が見えなくなるまで見届けてから、私は階段に背を向けて、藤が丘方面の電車を待つ列に加わった。

「次の名城線、あと 5 分だって。間に合ったね。」

5 番出口から降りて改札の少し手前、券売機の前まで来たところで、隣を並び歩く貴女が笑う。

あの日と同じように、貴女の背に続いて改札を抜けた。階段を降りて、名城線のホームへ続く階段を目指す。

東山線のホーム中央。立ち止まらない。
もうここで手を振ることは無い。猫背を見送ることも無い。

一緒に名城線のホームを目指して階段を降りる。
「今日の居酒屋、お通しが最高だったよ。」
そんな話をしながら、貴女と同じ電車に乗る。

貴女と同じ帰路につく。
そんな幸せを、あの改札を通る度に噛み締めながら。

作品番号：14
選択画像：C
作品タイトル：希望の泉

　到着した電車の扉がなかなか開かない。わずかに開き始めた瞬間、ホームに飛び降りる。人混みをかき分けて階段へ突進し、一気に駆け上がる。そのまま地下鉄栄駅の改札を通り抜けた。
　東京出張から名古屋へ帰る新幹線が季節外れの大雨で遅延した。全人類を代表して異常気象を呪う。
　モバイルバッテリーを持ち忘れた中、スマホの充電が切れ、美咲に遅れると連絡できない。焦りが胸を締め付ける。
　介護が必要になったお母さんのため、美咲は秋田に引越すことになった。将来について二人でじっくり話し合い、別れを決めた。良い別れにするため、引越し前日の今日、最後に会うことにした。
　地下街を全力で駆け、ようやく待ち合わせのフェニックス・スクエアに着いた。だが、美咲の姿はない。柱の周りを何度も回るが、広告が空虚に遷ろうだけだ。時計を見ると、待ち合わせ時間を 1 時間以上も過ぎている。
　だめだった。
　絶望に打ちひしがれ、茫然と立ち尽くす。
　過ぎ去った時間の重さが押し寄せてくる。
　息が少し落ち着き、スマホを復活させて連絡を取るしかないと思うと、急に新鮮な空気が吸いたくなった。
　五番出口から地上に這いあがると、凍てつく冷気が肌を刺した。無意識に足が噴水のある広場へ向かう。そう言えば、初デートの待ち合わせはここだった。
　水しぶきの向こうに、ふと人影が揺らめいた。
　まさか。
　噴水の縁をそっと回り込むと、美咲が光を放つように佇んでいた。
　まず遅れたことを謝るべきなのに、違う言葉が口をついた。
「なんで……。なんでここにいるの？」
　驚きと寒さで声が震えた。
　美咲は白い息で答えた。
「帰ろうとしたの……でも、最後に噴水を見ておこうって」
　胸が熱くなった。心の泉から言葉が噴き上がった。
「ありがとう！　本当に、ありがとう！」
「ありがとうって、何が？」
　首を傾げて美咲が微笑むと、辺り一面が輝き、寒さも異常気象もすべてが消え去った。
　二人の背後で、噴水だけが絶え間なく噴き上がっていた。

作品番号：15
選択画像：C
作品タイトル：九月一日

　ピピッ。ピピッ。交通系 IC カードをタッチした、ただ無機質な音が鳴り響いている。朝の時間帯ということもあって栄駅は混んでいた。
　九月一日。一年で一番自分を見失う日。私は重い足取りで券売機に向かった。そして券売機を前にし、切符を買おうと意気込むも、指先が震えて動かなくなった。
　いきたくない。
「チッ。早くしろよ。お気楽な学生と違って急いでるんだよ」
　唐突な中年男性の舌打ちに驚き、慌てて切符を買ってポケットにしまい、その場を離れた。
　怖い、みんな怖い。だから、だから仕方がないんだ。私はその場でしゃがみこみ、静かに泣いた。
　私はみんなみたいな「普通」ではない。みんなみたいになりたかったなあ。
　「……あんた」
　苦しい気持ちに押しつぶされていた時、女性の声が聞こえた。恐る恐る顔を上げると、そこにはふくよかな体型の中年女性がいた。
「あんた、ちょっとこっちにきな」
　状況を理解する前に自販機に連行された。
「あんた、逝くなよ。生きろよ」
「……っ！」
　なんでおばさんが私の考えを知っているのか。それを尋ねたかったが声が出なかった。
　おばさんは交通系 IC カードを取り出し、自販機にかざした。
　ピピッ。あの無機質な音が聞こえた後、おばさんはしゃがんで缶を取った。そして、おばさんはその缶と小さな紙を私の手に押し付けた。
「踏ん張りなさいよ。……応援してる」
　そう言っておばさんは去っていった。
　私は自身の手を見た。そこには、おばさんがくれたミルクティーと名刺があった。静かに缶をぎゅっと握ると、缶の温かさがじんわりと伝わってきた。
　踏ん張りなさい、か。私はポケットから切符を取り出し、ぐしゃっと丸めた。そして、缶をぎゅっと握り、改札に向かって歩き出した。
　スマホから定期券を取り出し、改札にかざした。
　ピピッ。あの無機質な音が聞こえた。不思議と、嫌な感じはしなかった。

作品番号：16
選択画像：C
作品タイトル：吸い込まれるように。

今から 24 年前。
就職を機に青森から名古屋に出てきた。
故郷は車必須の地域で、電車に乗った回数は片手で足りるほどだ。

3 月のまだ寒い名古屋駅。
大きな駅に圧倒され、まるで迷路の中に迷い込んだような気分だった。
寒いはずなのに、変な汗が体を伝う。

JR、地下鉄、名鉄、近鉄。
鉄道網の羅列が、私の不安を煽る。

「共和駅はどう行けば…？」

18 歳の私は半泣きだった。

駅員さんに「JR で豊橋行きに乗ってください」と教えてもらい、人波をなんとかすり抜けやっとの思いで乗車。
共和駅に無事たどり着いた時は、心底ほっとしたの今でも覚えている。

数ヶ月もするとすっかり新しい生活にも慣れ、休日は買い物や飲みによく出掛けるように。
共和駅から久屋大通駅が、その頃のお決まりルート。
迷うこともほとんどなくなり、私は少しずつ名古屋に馴染んで行った。

あの日から 24 年。
こんなにも長くいるなんて、当時は想像もしていなかった。
人生の半分以上を名古屋で過ごしている。
この地で結婚をし、子供生み育て、人生を紡いできた。

たくさんの人と出会い、泣き、笑い、傷つき、喜び生きてきた。
これからも、そう過ごしていくのだ。

名古屋が好きとか嫌いとかは、正直ない。
たけど私の大切なものは全てここにある。

だからきっとこの先も、私はここで生きていくのだろう。
土地に根付くとはこういうことなんだろうなと、ふと思う。
静かで淡々とした愛着のような。

41 歳の私は涼しい顔で駅の人波をすいすい歩く。
JR、地下鉄、名鉄、近鉄に金時計、銀時計だってばっちりだ。

迷子で半泣きだった私はもういない。
あの日の緊張感が嘘のように、慣れた足取りで改札を通り電車に乗り込んでいる。

そう。
まるで吸い込まれるように。

作品番号：17
選択画像：C
作品タイトル：退勤ラッシュを抜け出して

　間に合え！

　私はパンプスの低いヒールを鳴らし、名城線に乗り換えるために地下鉄栄駅の階段を駆け下りる。この電車に間に合えば全てチャラになる、気がする。デスクワークで鈍った身体を叱咤し名城線三番線のりばに到着した瞬間、嘲笑うかのように目の前を電車が通過した。

　間に合わなかった。ジャケット越しの背中にじわりと汗がにじむ。仕事帰りのいい大人が早く帰りたいというだけで全力疾走するものではない

　八月二十一日水曜日。今日は朝からツイていなかった。寝坊するし眉毛を描くのを失敗するし出勤時刻に何とか間に合ったはいいものの弁当を忘れた。連動するように仕事も上手くいかなくて取引先に平謝りするはめになった。

　次の電車は五分後。スマホで時刻を確認すれば二十時を過ぎている。退勤ラッシュの地下鉄のホームは電車を待つ人間で鮨詰めだ。いつもは何てことないのに私は嫌気が差して、気がつけば東改札口を出ていた。

　地下鉄栄駅は私にとって職場に赴くための乗換え駅となって久しかった。小学生のころは百貨店で母親の荷物持ちをしたご褒美にコンパルでエビフライサンドを食べた記憶があったはずなのに、数年で上書きされてしまった。

　改札を出て黄色い出口案内板が張られている支柱に寄りかかり、ぼんやり上を向く。地下街特有の低い天井に蛍光灯が目に入る。そうしている間にも私の前で人々は行き交っている。改札口に吸い込まれていく者もいれば、森の地下街やオアシス２１に遊びに行く者もいるのだろう。

　オアシス２１で友人とウインドウショッピングを楽しみタピオカを飲んだこともあったと思い出す。その日は私の誕生日で、二十一日生まれだという理由でオアシス２１で遊んだっけ。「ん？」私は眉をひそめ、端末で日付を確認する。八月二十一日と時刻の上に控えめな表示。

　エビフライサンドを食べよう。その後はタピオカも飲もう。私は改札を背にして徐ろに歩き出した。

作品番号：18
選択画像：C
作品タイトル：東山線〜別世界へ〜

　東山線ね、私は時々乗るよ。星ヶ丘駅からデパートまですぐ行けて便利。それからホームに動物たちのシルエットのある東山公園駅、好きだな。小さい頃おばあちゃんと一緒に、ここで降りて動物園へ行ったよ。
　そういえば、おばあちゃんから聞いたな。昔は東山線の電車は黄色で、「黄電」と呼ばれてたんだって。ただの黄色じゃないよ。ウインザーイエロー。おしゃれな響きだね。暗い地下でも目立つように、この色にしたみたい。
　あとさ、一社から上社へ向かう時、電車が坂を上って行って地上に出るじゃない。あの瞬間、生まれ変わって、ふっと別世界へ、そう、天国にでも来たみたいって思う。外の景色が広がってて、夕暮れ時なんか空が茜色で、マンションとか家々の灯とか見てると、涙が出てきちゃう。だけど「黄電」は窓が開けっ放しだから地上に上がったら、風がビューッと入ってくるから飛ばされそうになるらしい。冷房完備の電車に変わってからは、窓は閉め切ったままだから大丈夫だけどね。
　えっ⁉どこの駅が一番好きかって?そりゃあ、栄か伏見か名古屋でしょう。だって人がたくさん乗り降りするもの、もう、よりどりみどりって感じ。若い女の子がいいとか、そんなことは言わないよ。だれでもいい、近くの人から、ちょっと失敬して。
　あ!
　パシッ‼
　「なんで地下鉄の中に蚊がいるの⁉」
　「地下は暖かいから、年中、蚊もいるよ」
　ううっ。これが、本当の、虫の、息。でもこれで、きっと、別世界へ、行ける、はず。

作品番号：19
選択画像：C
作品タイトル：道しるべ

「ねえ、ママ、黄色が気になる」
先ほど見かけた可愛い雑貨店に立ち寄らせてもらえず、全身で不満をあらわにし、地下街を桜通線の改札口へ向けて足取り重くしょげていた紬がふいに話しかけてきた。
「黄色は東山線だから、乗り換えしないと帰れんよ。たくさん歩かんといかんよ？　」
「でも、気になる…… 」
　いつ頃からか、紬は『気になる』と言う言葉をよく使うようになった。何かをしたいと言ってもダメと言われる事が多く、十歳そこそこの子どもが経験則として身につけてしまったのかもしれない。
また、何々をしたいと言われれば簡単に却下出来るのに、『気になる』には無下にあしらう事が出来ない不思議な力があると真由美は感じていた。
　今日は紬の大好きなアニメキャラクターを題材としたイベントが名古屋駅で期間限定開催されており、ここまでやって来た。
販売飲食メニュー一品毎に限定缶バッジがランダムでもらえる為、各々ドリンクと軽食、スイーツまで注文して紬の食べきれない分も真由美が引き受け満腹の上、地下街のあちらこちらに紬が興味を示し、歩き疲れてもいた。
　黄色いフロアシートサインを平行棒のように歩きながら紬が真由美の腕を引っ張って言う。
「東山線も、ちょっと乗ってみたい」
いいから桜通線で帰るよと言いかけ、黄色と赤の道しるべが分かれて行く床を見つめながら真由美は少し深めに息を吸い込んだ。
「じゃあ、東山線に乗ろうか」
「いいの？！　」
瞳をキラキラさせて紬は声を弾ませた。
「黄色でも赤でも、水色でも紫でもピンクでも、どれに乗ってもママは家に帰る方法を知っとるんだよ」
「なんで？！　ママ、すごい！　」
　そう、紬にはまだまだ知らないたくさんの選択肢があって、どれを選ぶのかも紬の自由なのだ。親は線路ではなく標識でいい、どの道を行くのかは子が自分で考えるだろう。
　黄色い平行棒を渡り終え、軽い足取りで東山線改札口を通る紬の manaca も、ピヨピヨと嬉しそうに鳴いた。

作品番号：20
選択画像：C
作品タイトル：もぐらになって

「ママ、今日は地下鉄に乗らないの？」と、5歳の息子が聞いた。
「そうね、今日は地下鉄には乗らないけど、地下街をあるいて買い物するの。」
「ふ〜ん。」と、息子がちょっぴり口を尖らせた。

前に地下鉄に乗り、東山動物園へ行ったことがある。
きっと息子は今日も、遊びに行けると思っていたらしい。
つないだ息子の手が、少し元気がなくなった。

そんな息子の手を引いて、私は地下街を歩いていた。
お盆休みに実家へ帰るため、手土産を探しに久々に名古屋へやってきたのだ。
相変わらず名駅の地下街は、多くの人がたくさん行き来し、ごったがえしている。
そんな人の多さに、息子の顔はつまらなそうだ。やっぱりお買い物は退屈かな。でも夏の動物園は暑いし…そう思っていたら、あのキャラクターがバーンと目に入ってきた。
「じゃあ、今日はモグラになって地下街を探索しよう！」と、私がサンロードのキャラクターである“もぐらのチカちゃん　サンちゃん”のポスターを指さし提案した。
「え？もぐら？」と、息子はすっとんきょな声をあげた。でも、瞳の中はキラキラしていた。
「そうよ。もぐらになってお買い物するの。たくさん人がいるけど、うまーく人の波を避けて進めるかな。」そういうと、息子はケラケラ笑って、
「アハハッ、なんかゲームみたい。」といった。息子の頬に小さなえくぼができた。
「それと、生き物をさがすよ。まずはカエルさん。」
「え？カエル？」そういってむかったのは、青柳ういろうのカエルまんじゅう。
「つぎは猫さんと鯛。」と、招き猫と鯛のイラストが描かれた桂新堂のエビせんべい。
「つぎは鯱。」金鯱の形の元祖鯱もなか。これで手土産ゲット完了です！
「最後はねぇ、ひよこさん。」見た目が愛らしいケーキ、ぴよりん。
「わぁー、かわいい。」と、ショーケースを見つめる息子。
「これは、お家に帰って食べようね。」と私がいうと、なんとも大事そうにケーキの箱をかかえる息子だった。